

ながたに暮らし体験記

お披露目とお泊り体験

8月20日(土)～21日(日)は、「来ちみなあハウス」のお披露目会と初めてのお泊り体験の日です。福岡から参加のM会員と私の到着は時刻近くになってしまいました。先発の買出し組みも帰ってきて、お披露目会の始まりです。

本来は、店子の我々がすべてを準備して、地元の方々に招待すべきところですが、アユやカマツカの甘露煮、蒸しナス、ウリと酢味噌等、差し入れがたくさんあり感激です。

時刻まで暑かったことが嘘のようで、夜になると屋外から涼しい風が入り、虫の声も聴こえてきました。地元のTさんの鳥の声の聞き分け方等の話が面白く、夜は過ぎて行きます。

座敷に4人分の貸布団を敷いて就寝の準備。しかし、夜なべ談義は続きます。共助研のこれからや自分達の生い立ち等、日頃はできない話も出てきて気が付いたら1時近くになっていました。こんな風に時間を気にせず話しができることもこの家のお陰。

翌日は、H会員も参加して、おやつの再現プロジェクトや県への応募事業について打合せ。M会員は近い将来のリフォームに向けて、帰りの時間間際まで、外構等の寸法取り、活用やリフォーム等への夢が膨らみます。

ついでの間までは思いも付かなかった「来ちみなあハウス」での活動が始まりました。この先の展開を楽しみにしてください。(木寺佐和記)



「来ちみなあハウス」の使用について

- 店子会員は、自由に使えます。
店子会員は、「共助研」メンバーで店子会費を支払った方と、「柴北川を愛する会」会員です。
現在、店子会員を募集中です。入会希望の方は店子グループ「管理人」までご連絡ください。
- 一時使用も可能です。
店子会員でなくても、ハウスの一時使用は可能です。
使用料は要りませんが、維持管理のための寄付をお願いします。
- お問い合わせ等は、店子グループ「管理人」まで。
・波木健一（共助研・事務局）
・渡邊雪法（柴北川を愛する会・事務局長）

2016年9月1日発行



来ちみなあ 2号

「来ちみなあ」は、柴北上の県道から北に入った山際にある「来ちみなあハウス」（和洋室5室、ダイニングキッチン、バス、トイレ付住宅）での活動を紹介する通信です。
発行：「来ちみなあハウス」店子グループ

ながたに風



「来ちみなあハウス」が動き始めました。

先月20日には共助研の店子さん4名が「初めてのお泊り」を体験されました。空き家活用に興味を持たれた「大分合同新聞」の取材もあり、記事を楽しみに待っています。
「柴北川を愛する会」も25日夜に「役員会」で使わせていただきました。

9月の「ながたに」の動きですが、中旬には彼岸花が咲き始め、下旬からは稲刈りが始まります。

「柴北川を愛する会」では、3日(土)にレディースが先進地視察で福岡県東峰村を訪ねます。

4日(日)は山内河川敷と県道の草切りを行い、夕方から「来ちみなあハウス」で慰労会の予定です。

また、来月10月23日(日)には、恒例となった収穫祭(稲刈り)を行います。(渡邊雪法)



共助研からの伝言

宿泊キャンプやNPO協働事業のこと

8月6・7日に、長谷へ大分市の「西の台小学校ととろクラブ」が交流キャンプに押しかけました。

「ととろクラブ」は、平成23年の「花いっぱい長谷まつり」に参加して以来6年目のお付き合いとなっていて、「柴北川レディス」の料理が大好きです。そんな「ととろクラブ」のメンバーから、「長谷にキャンプに来たい」という意見がでて今年実現となりました。

キャンプの場所は、旧長谷小学校です。6日は、午後から柴北川で川遊び、夕方から長谷の方々との交流会。子どもたちは周りを気にせず花火ではしゃぎ、楽しく就寝したようです。翌日も、田植えした稲の成長具合を見て、竹で水鉄砲を作ると、楽しい時間を過ごせたようです。このような交流を今後も続けていければと思います。

また、今夏は、「柴北川を愛する会」が大分県のNPO協働モデル創出事業に応募することとなり、共助研もお手伝いしました。

応募する事業案件は「葦やヨシ等の繁茂を原因とした小河川の洪水不安の解消」です。

この事業への応募団体は、8/30時点で28団体。まず9月中旬に書類選考の結果連絡があり、続いて9月末に審査員の前で15分間のプレゼンテーション、15分間の質疑応答に耐え

なければなりません。最終選考の結果4団体が選定される流れとなっています。選定された場合は、長谷の皆さんにも2年半の協力をお願いしたいと思いますのでよろしくお願いします。(波多野健志)

長谷でも「田園回帰」を!

昨年平成27年度は、全国で「地方創生」の嵐が吹き荒れました。全国で少子高齢化が続くなか、東京首都圏への人口集中が近年さらに進んでおり、その結果、50年後には地方部の多くの自治体が消滅すると危惧されました。そこで、地方部に元気を取り戻し、若者達を呼び戻そうと、全国すべての自治体が「地方創生総合戦略」というプランをつくりました。

勿論、豊後大野市でも、地域の資源を活かした仕事づくり、市外からの移住・定住の促進、さらに子育てや婚活の支援などのプランを打ち出して、大都市部などから市内への人口受け入れを進めています。

この都市部からの人の移住・定住、さらに移住者などによる農業や産業の活性化などの社会現象を「田園回帰」と呼びます。

私たち「共助研」も、農山村部での元気づくりに「田園回帰」が重要だと考えています。そして、この8月に開設した「来ちみなあハウス」を、「長谷地区での「田園回帰」をどう進めていくか」について、地元の皆さんと共に考え、実行する場としたいと考えています。(波木健一)